

# コミュニケーション能力の育成を 目指した実践的研究

—アレロパシーを教材とした「課題研究」を通して—

学籍番号 179976

氏名 谷口 太一

主指導教員 岡 博昭

## 1. 背景と目的

本稿では、中央職業能力開発協会（2004）を参考に、コミュニケーション能力を「自己主張と傾聴のバランスを取りながら効果的に互いの意思を通わすことができ（意思疎通）、双方の主張の調整を図り、調和を保ち（協調性）、状況にあった訴求力のある説明やスピーチ、プレゼンテーションを行うことができる力（自己表現力）」と捉える。

21世紀社会は急速なグローバル化等の影響で、今まで誰も経験したことのない課題を解決していかなければならない、いわば「多文化共生の時代」である。また、次期学習指導要領では、現代社会で求められる資質・能力を生徒に身に付けさせるために、探究型学習が重視されている。その先駆けとして、現在SGHやSSH指定校を中心に探究学習の一環として課題研究が行われている。課題研究とコミュニケーション能力は密接な関わりがある。なぜなら、課題研究はグループで行うことが基本であり、また探究した成果を発表することも求められるためである。しかし、課題研究においてコミュニケーション能力の育成を重視した実践報告はほとんど見当たらない。今後、他者と協働したり、自分の考えを表現したりする機会が多くなる高校生に対して、課題研究を通してコミュニケーション能力を育成させる意義は大きい。

以上のような背景から、本研究では、課題研究の授業を通して生徒のコミュニケーション能力を育成することを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究は、次のような流れで行った。まず、授業観察や質問紙調査を通して生徒の実態を調査することで、コミュニケーション能力のうち、育成する要素について焦点化した（第2章）。次に、生徒が課題研究に意欲的に取り組める、有効な教材の開発を行った。その際、専門家の意見を踏まえて予備実験を行った（第3章）。その後、開発した教材を用いて授業を行い、生徒のワークシートの記述や実験中の様子、考察の内容などから課題研究の教材としての有効性を検証した（第4章、第5章）。そして、生徒のコミュニケーション能力を育成するために、課題研究の授業冒頭で短時間のスピーチ活動を行い、ループリックを用いて評価することでコミュニケーション能力の向上を確認した（第6章、第7章）。

### 3. 実践の結果と考察

授業観察や質問紙調査により生徒の実態調査を行った結果、実習校の生徒はコミュニケーション能力のうち自己表現力に向上の余地があるとわかったため、これに焦点化した。

課題研究で使用する教材を選定するために文献調査を行った結果、アレロパシーに着目した。アレロパシーを教材とした課題研究では、これまでエタノールなどの有機溶媒を用いての実験が行われていたが、予備実験を行った結果、エタノールを用いた実験には問題があると判断した。そこで他の可能性を調査したところ、アレロパシー研究で広く用いられているサンドイッチ法が有効であると考え、これを教材化した。

学校実習では、筆者が提示したアレロパシーの講座に11名の生徒が集まった。生徒は適切に課題を設定し、目的に沿って実験データを集め、一連の成果を中間発表会で他の生徒や教員に伝えることができた。また、中間発表会後は、これまでの研究成果を踏まえて発展的に探究を行い、生徒のワークシートの記述や質問紙調査からは意欲的な様子が伺えた。これらはアレロパシーが課題研究の教材として有効であることを表していると考えられる。

アレロパシーの現象を探究する授業を進める中で、自己表現力の向上を図るため、前期では授業冒頭に30秒間スピーチ法を実施した。「論理的な文章構成」「音声的コミュニケーション」「非音声的コミュニケーション」「発表時間」の4観点について、ループリックを用いて評価した。計7回スピーチを実施した結果、第1回目に比べて第7回目では「音声的コミュニケーション」で有意な向上が見られた。練習を重ねることによる声の大きさや話すスピードの改善や、「あー」などの余分な言葉の減少につながったと考える。しかし、その他3つの観点の得点に有意な変化は見られなかった。

そこで、課題研究の中間発表会後である後期授業から、①スピーチを1分間に延長すること、②発表の「型」としてPREP法を導入することという指導・改善を行った。計4回スピーチを実施した結果、第1回目に比べて第4回目で「論理的な文章構成」「音声的コミュニケーション」「非音声的コミュニケーション」の項目で有意な向上が見られた。また、後期のスピーチ活動は前期のスピーチ活動に比べて生徒が意欲的に臨んでいる様子が伺えた。これは、スピーチ時間を1分間にしたことや、PREP法を導入したこと、さらには中間発表会を経験したことが効果として現れたと考える。

さらに、外部の発表会において担当班は審査員によるループリック評価で高評価を得ることができ、優秀賞を獲得した。これは、生徒が高い自己表現力を有していることを示しており、スピーチ活動が効果的に作用したと考える。

### 4. 今後の展望

今回スピーチの評価観点として挙げた4項目のうち「発表時間」は向上がみられなかった。これは、練習の回数が少なかったことに起因すると考える。今後は練習回数をいかに確保するかが課題となる。また、今回は11名の生徒を対象とし、筆者がループリックで評価した。今後、対象の生徒や評価者を増やし、評価の信頼性を確保する必要がある。さらに、教材として使用したアレロパシーや1分間スピーチ法などは、少なくとも実習校の生徒には有効であったが、一般性を持たせるためには、複数の学校での実践が必要である。